

2002年度卒業論文紹介

1. 大野賢馬エリック

『赤ずきん』のパロディ分析

—機能的文体論とテキスト間相互関連性の観点から—

「文体は人なり」と言うように、文体は話し方・書き方というだけでなく、その人物の職業・年齢・性別のような社会的な情報や、性格・機嫌・相手に対する態度のような個人的な情報を相手に伝える。つまり私たちは日常生活でも、相手や状況に応じて文体を使い分ける必要があるのである。

しかし特定の文脈で私たちは、意図的に相手にとって不自然な文体を使ったり、状況にそぐわない文体で話したりする。この典型と言えるのが冗談や悪ふざけといった「笑い」に関わるコミュニケーションである。この種のコミュニケーション状況において、どのような要素が使われることによって、どのような文体が作り出されているのかを分析したのが、この論文である。

分析の対象としては、インターネット上で手に入れた『赤ずきん』のパロディを選んだ。これらのパロディは『赤ずきん』が様々な文体で書かれていて、原作との違いや文体の不一致による可笑しさを楽しむものである。こうしてインターネット上で検索できた『赤ずきん』のパロディの種類は57種類にも及んだが、その中でも人物・職業・年齢という3つの特性に絞り、『赤ずきん』の「ヒトラー版」・「役所ことば版」・「若者ことば版」を分析対象とした。これらを機能的文体論の観点下で、語彙的文体要素・統語的文体要素の2つに注目し、「～らしさ」がどのように表現されているかを分析し、さらにテキスト言語学のテキスト間相互関連性という観点から、原作との違いがどのように表現されその効果が何であるかを分析しようと試みた。今回の分析ではこれらの観点に留まったが、さらに詳しい分析を行なうには文体要素をさらに下位区分、あるいはさらに違った文体要素も加える必要があると考える。

こういった観点からパロディを分析していくと、それぞれのパロディに特徴的な要素が意図的に使われているのが分かる。まず「ヒトラー版」には多くのナチ用語（例えば、BDM〔ドイツ女子青年同盟〕、NSV〔ナチ・国民福祉団〕など）が使われ、細かいところに当時の習慣や情勢が散りばめられている。次に「役所ことば版」では指示代名詞や機能動詞（例えば、zur Durchführung bringen〔実行する〕、unter Beweis stellen〔証明する〕など）の多用といった、複雑な構文が多く見られ、あたかも役所の書類を読んでいるかのような表現が意図的に使われている。最後に「若者ことば版」では口語を再現した表記（drauf, sonen, isなど）が多く使われ、話しことば風の文章となっている。このようにどのような要素が使われているかを見ていく事で、面白さがいかに表現されているかだけでなく、作者がその文体にどのようなイメージを持っているのかも見えてくる。例えば「役所ことば版」では、話しことばには適さない名詞文体を使う事によって、役所のコミュニケーション能力の欠如や、人間味のない態度を表わしているだろう。「若者ことば版」では、話しことば風の言い回し（例えば、jedenfalls〔ていうか〜〕の多用、Scheiße!〔くそっ〕など）を使い、若者の言葉づかひの悪さや言葉の乱れを表し、ストーリーの中にも性や遊びといったものを取り入れる事で若者の興味や特性を表わしている。このように文体要素の働きは文体を構成する一要素に留まらず、その使用者がその文体にどのようなイメージを持っているのかを伝える役目も持っている。

「文体」が多様に存在するという事は、それが私たちの日常生活の潤滑油である。さらに私たちは、それらのおかげで人の性格や特性を表わす手段をも手にしている。パロディといった「～らしさ」を最大限に表現するテキスト種を分析することによって、文体の効果だけでなく、話し手が持っているステレオタイプやイメージを知る事もできる。このように言葉を機能や効果という面だけでなく、その後ろにある文化や考え方に注目するような研究を今後はしていきたい。

2. 林 拓磨

東ドイツスポーツ政策の実態と統一による崩壊 —主に競技スポーツ政策に焦点を当てて—

東ドイツにおいてスポーツ政策は国家と密接な関係を保持し続け、国家戦略として行なわれた。しかし1990年のドイツ再統一によってそのすべてが消滅してしまったと言っても過言ではない。東ドイツスポーツ政策の興隆から崩壊にいたる一連の経緯を見つめることによってドイツ再統一をまた違った視点から見つめられるのではないかと考えた。この論文は序章から始まり5章構成となっており、5章以降に参考資料として略語表、表、統計を付している。以下に各章を簡単に紹介する。

第1章：東ドイツの歴史的過程—敗戦から再統一まで—

敗戦から統一までを4つに区分し、後述する東ドイツスポーツ政策の歴史的位置を示すために役立てた。

第2章：東ドイツのスポーツ組織

敗戦直後、社会主義統一党（SED）が単独独裁体制を樹立し、その下部組織として自由ドイツ青年同盟（FDJ）、ドイツスポーツ委員会（DSA）など多くのスポーツ組織が創られた。東ドイツ国民は幼少の頃からスポーツ組織への参加が義務付けられ、なかでも競技スポーツ（Leistungssport）の発展には全力が尽くされた。「社会主義的人格」の内在化と東ドイツ国民としてのアイデンティティ形成、アスリートの育成、ドーピングの使用と隠蔽などがスポーツ組織に委ねられた。

第3章：東ドイツスポーツ政策の目的はなんだったのか

どうして国家戦略としてスポーツ政策を行なわなければならなかったのかという目的を明らかにし、どの程度この目的が達成されたのかを追求した。国家戦略としてスポーツ政策を行なった背景には東ドイツの置かれた状況が起因する。1961年の「ベルリンの壁」構築以降、より一層対外的関係は希薄となったが、60年代後半に国際オリンピック委員会（IOC）に正式加盟し、70年代初頭に国連に加盟するなどやや対外的に軟化の傾向をたどった。そんななかにおいても東ドイツ政府は西側との接触による国内体制への悪影響を恐れ、社会主義体制の優位性と西側諸国との差異を一層強調した。対外的な関係が軟化傾向を辿っていたとし

ても、非常に閉鎖的な枠組みに置かれていた東ドイツにとって自国の優位性と東ドイツという国家を国外に認めさせるための方法としてスポーツという手段しか残されていなかったのである。そのため東ドイツ政府はオリンピックや他の国際大会で勝つために優秀な人材を発掘、育成したのであった。1972年の夏季ミュンヘンオリンピックでは獲得総メダル数がソ連、アメリカに次ぐものとなり国家的な認知度と国家承認に弾みがついた。こうして東ドイツスポーツ政策は世界的な注目を浴び、国家承認を得ることにおよそ成功したのであった。しかし、たとえ東ドイツスポーツ政策が対外的に認められたとしても社会主義体制の優位性や国内における社会主義的人格の形成はほとんど達成されなかったのである。こうした要因が東ドイツ崩壊につながった。

第4章：東ドイツスポーツの崩壊

スポーツ政策によって国家承認が進んだにも関わらず、東ドイツ政府が思い描いていたほど国民のアイデンティティ形成は進まなかったのである。1989年9月上旬に起きたライブチヒのニコライ教会月曜デモを皮切りに、民主化を求めるデモが東ドイツ国内で爆発した。そして、こうした動きがより一層高まり、1989年には「ベルリンの壁」が崩壊し、翌1990年にはドイツが再統一し、再統一という名のもとに東ドイツは崩壊したのである。東ドイツ政府と密接に関係を維持しつづけてきたスポーツ組織、スポーツ政策も同様に国家の消滅と共に崩壊したのである。再統一以降、東ドイツスポーツ政策の実態が堰を切ったように明らかにされ、ドーピング使用が大きな問題として浮上したのである。

第5章：結論

東ドイツスポーツ政策がもたらした恩恵は何一つなかったのであろうか。表面的な追求にとどまることなく今後より一層の細部解明が求められる。